

シンポジウム報告 「子どもの挑戦力を引き出すには」

1. はじめに

シンポジウムでは、富山ならではの子どもの挑戦として、自然への挑戦(立山学校登山)、社会への挑戦(14歳の挑戦)、伝統への挑戦(伝統芸能八尾おわら)の三つにスポットが当てられ、各パネリストから話題提供に続いて、子どもの挑戦のあるべき姿、地域からの支援、挑戦の効用などについて議論があった。最後には子どもおわらの踊りが披露された。以下に仔細を述べる。

2. 立山学校登山 by 増田準三氏

旧制学校時代では立山登山そのものが精神鍛錬として位置づけられており、これが最近まで登山の原点となっていた。2003年に小学生の転落事故があつてからは、登頂のみの目的が問われ、今では親子のふれあいを目的として登山が実施されている。

しかしながら、依然として登頂のみや鍛錬という目的が残り、子どもには負担が強いられていると指摘があり、続いて子どもは自然とどう向き合えばいいのか考えるべ

きとして、もっと自然と接するような登山があるべきとか、中学生になってからの登山がいいのではとの提案があった。

3. 14歳の挑戦事業 by 星野正義氏

14歳の挑戦事業は、子どもに社会性を身につけさせることを目的に総合学習の一環として県全域の中学校で十数年前から始まった。当時、県教育委員会で事業を担当されていた星野氏からは、事業立案の背景には子どものいじめ問題があったことや、事業実施には地域ぐるみの取り組みとして如何に推進したか等の説明があった。また、事業が今なお継続しているのは、「地域で子どもを育てる大切なチャンス」と地域の方々や学校側が考えているからであると力説されていた。

4. 伝統芸能八尾おわら by 吉田渉氏、橘賢美氏

吉田氏は保存会が今直面している問題について、橘氏は日常的なおわらの演舞活動について話題を提供された。

「おわら」は「おわらい」を語源として初めから庶民性に満ちていたものの、保存会初代会長川崎氏が子どもから大人まで踊るようにしたことが町あげでの取り組みを可能にし、伝統を町ぐるみで守ることとなった。こうした町ぐるみの営みができるのも、地域コミュニティが健全であり、特に人間の縦系列のつながりがあるからである、と力説されていた。

5. 討論

話題提供後、子どもの挑戦の積極的推進を念頭に子どもへの働きかけ方、子どもの挑



戦による地域への効用等について討論が進められようとしていたが、話題提供者の熱弁により、参加されていた方々の思いが喚起されたが如く、子どもの挑戦を多面的に見るべきとして議論に火がついた。

立山学校登山については、元小学校教師からは、子どもが進んで挑戦していること、登頂が子どもにとって達成感のある貴重な体験となっていること等の実情が述べられた。(これは富山県民の多くの方々の意見といえる。) これに対して増田氏はそのようなことを否定するのではなく、子どもにとって負担になるケースを指摘したのであり、子どもが登頂以外に山の宝をもっと発見し山を堪能するようにもなって欲しい、と述べておられた。(これは自然愛好の多くの方々の意見といえる。) こうして議論が白熱した背景には、自然に対する多様な日常的意識が登山そのものを奥深いものにしていくことをあげたい。

その他の討論として、挑戦した子どもの成長について、各パネリストから状況が述べられた。14歳の挑戦では有形無形に効果があることや、おわらでは子育ては地域コミュニティの形成へとつながっていて、取り立てて議論不要で当たり前のこととの説

明もあった。

なお、討論の最後には、次のような温かい激励の感想も寄せられた。「各取り組みは長年磨き上げられて継承発展してきている素晴らしいものという感じがします。関わられた方々の熱い思いが子どもを間違いなく心身ともに健やかに成長させ、代を重ねてきているところを目の当たりにしました。今後ともがんばってください。」

6. 子どもおわらの演舞

八尾小学校6年生の有志11人が教壇の前をステージにして10分ほど踊りが披露された。ハッピー姿の勇壮な男踊りと浴衣姿の優雅な女踊りが皆さんの心を捉え、会場は大いに沸いた。演技終了後には、本会前会長や現会長が前にでて子どもたち一人ひとりに今後の頑張りを期待して励まし握手されていた。

7. おわりに

今回は富山らしい地域全体での取り組みの熱い思いが目を見張るものであったためか、会場はまずは感動から始まり、心意気が大事にされる地域の環境づくりが必要といった根源的なことを確認した。これをもってまとめとしたい。

